まんがでSDGs!!

2019年度 湘南学園中高
図書委員会 企画班有志

はじめに

私たちの学校、湘南学園中学高等学校はESD教育に取り組むユネスコスクール（※1）として、国連が掲げるSDGｓ（※2）を理解するための様々な取り組みを行っています。

その過程でたくさんの知識を得ることはもちろん大切ですが、最も重要なのは、様々な問題を他人事ではなく「自分ごと」として捉えることです。しかし、まだ人生経験が少ない私達にはそれらを身近に感じられるような機会があまり多くありません。

どうしたら様々な問題をもっと身近に感じることができるのか？
そこで思いついたのが「まんが」の活用です。
まんがは中高生にとって、思わず自分から手に取りたくなるような身近なエンターテイメントです。また、登場するキャラクターたちや物語に感情移入しながら読むことで、自分たちが経験できないことをいわば「疑似体験」することができるのです。

自分たちが大好きな「まんが」を読むことで、誰かの抱える問題により添うことができれば、一石二鳥、Win-Winです。
今回はその第一歩として、この冊子を作成しました。
今まで何気なく読んでいたまんがを、SDGs的な視点をもって見つめなおしてもらえたら幸いです。

湘南学園中高図書委員会

※1　Education for Sustainable Development「持続可能な開発のための教育」。ユネスコスクールはユネスコの理念を実現するため、ユネスコより認定されたESDを実践する学校。
※2　Sustainable Development Goals「持続可能な開発目標」の略。国連が定めた17のゴール。

『健康で文化的な最低限度の生活』

柏木ハルコ　小学館（2014）

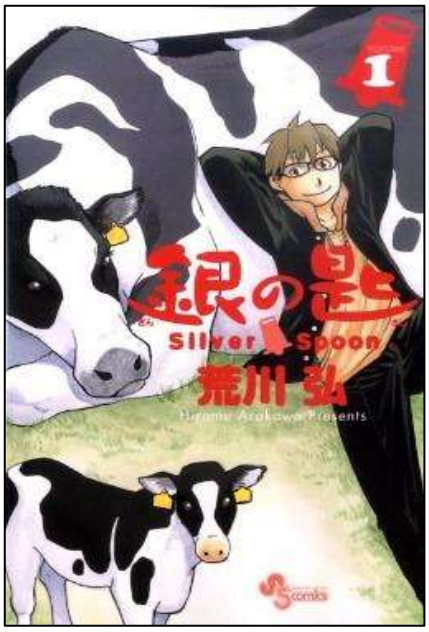
～あらすじ～
公務員として東京都のある区に就職した主人公・えみるは、福祉事務所に配属され「生活保護」を担当することになる。新米ケースワーカーとして生活に困窮する人々を支援することが仕事だが、ひとりひとりの置かれた状況や、歩んできた人生はさまざまで…ドラマ化され各種メディアや現職の福祉関係者からも高く評価される注目シリーズ

まんがでSDGs!!

タイトルの「健康で文化的な最低限度の生活」は、人間の生存権を表す文面として日本国憲法第 25 条に記載されており、小学生でも「基本的人権の尊重」として習います。とはいえ、はたして私たちはこのことの本当の意味を分かっているでしょうか？「文化的な生活」とは？そして、その「最低の」限度とはどのようなものでしょうか？

　このマンガの主人公のえみるも、最初からそれがわかっているわけではありません。むしろ、ケースワーカーとして様々な人の人生に触れていくなかで、その人が「人間らしく生きるために」生活保護ができることは何なのかを考えていきます。

　そして読者である私たちも、気が付くと作品の登場人物たちに共感し、どんどん引き込まれていくのです。漫画を通して疑似体験することで、中々とっつきにくい「生活保護」や「最低限度の生活」の真の意味を理解することができる作品です。



『銀の匙』

荒川弘

小学館　(2011)

～あらすじ～
「鋼の錬金術師」でお馴染みの漫画家・荒川弘が描く、汗と涙と家畜の酪農青春グラフティ！
　わけあって大蝦夷農業高校・通称エゾノーに入学した一般家庭出身の都会っ子・八軒勇吾は、初めて触れる生身の「農業」に悪戦苦闘しながらも成長していく。作者自身が農家の出身ということもあり、リアリティあふれる１冊。

まんがでSDGs!!

みなさんは食事をする時どんなことを考えますか？そのとき食べている食材を作った人のことや、どんな風に加工されその形になったかなんてまず考えませんよね？
　このマンガは、私たちがふだん何気なく口にしている食材が、どれだけの手数を経て食卓に並んでいるのか、ということを教えてくれます。なにより、主人公が農業高校で経験する未知の体験は私達にとっても衝撃で、新鮮です。「豚丼」と名付けて可愛がった豚を精肉しベーコンにしたり、ピザを食べようと思ったら石窯から準備したり…。むしろ、こういった「過程」を何も知らずに当たり前のようにモノを食べていることのほうが、異常なのかもしれません。
　このような作品を通して一人一人が食に対する理解を深め、そして考え続けることで、世界の飢餓や貧困は少しでも無くなるのではないでしょうか。

『食卓の向こう側』

魚戸おさむ 原作：佐藤弘

西日本新聞社（2007）

～あらすじ～
不健康な食生活を送っていた新聞記者の主人公・桜坂まりも。ある時、「食　くらし」をテーマとして取材をしている水城一角とともに行動することになる。精神、子育て、顔の輪郭…日常生活と食の関係性について様々な角度から学ぶなかで、まりもは何を思うのか？　西日本新聞社で注目を集める連載「食卓の向こう側」を漫画化。

この作品は、多くの現代人が食生活によって困ったり病気にかかっていたりする現状を示し、健康的な生活のためには食生活を改善すべきである、と私たちに訴えかけています。例えば、食の変化によって子どもの噛む力やあごの輪郭が変わってしまい、ろうそくを吹き消すことができない。あるいは、油分の多い食事によって、母親の母乳に大きな変化が生じてしまう、等です。この作品を読んで食生活の大切さを理解すれば、多くの人がおのずと自分自身の健康に配慮することが出来るようになるでしょう。

　また、各章が 100 ページ程度で分かりやすくまとめられていて、10 分程度で読み終わるので飽きることもありません。この様な素材を用いれば、一定の時間を必ずとることになる従来の教育よりも、効果的に食について学ぶことが出来るでしょう。

『透明なゆりかご』

沖田 ×華

講談社（2015）

～あらすじ～
作者の経験にもとづく真実の産婦人科医院物語。主人公の沖田×華は産婦人科の見習い看護師として、中絶の現場やその後処置を体験し、その衝撃に一時は仕事を辞めようと思う。しかし、出産の現場に立ち会い生まれる命の力強さに感動したことで、仕事を続けていく決意をする。
NHK でドラマ化もされた話題作。

まんがでSDGs!!

生まれてくる命、消えゆく命。その重さは違うんでしょうか？初めての妊娠中絶の現場。望まない中絶とそこにある複雑な感情。なぜ母親は産んだ子どもを置いていなくなったのか。お腹の中で子どもが亡くなってしまった、その悲しみを乗り越えるにはどうすれば良いのか。母親から DV を受け続けた女性がもつ母子手帳の内容とは…

正しく健康に産まれ、両親に愛され何不自由なく育つ。それを「当たり前」だと思っている人もいるでしょう。しかし、それは必ずしも「当たり前」ではなく、そう思えない人も多くいます。また、途中から「当たり前」でなくなるということも、多くあります。そこの貴方、ぜひこのマンガを読んでみてください。そして、「当たり前」があることがむしろ奇跡なのだということを、ぜひ感じてみてください。

『リアル』

井上 雄彦

集英社（2011）

～あらすじ～
バスケを辞めてから何もかも上手くいかなくなり、あげくバイクに乗せた女の子に障がいを負わせてしまった男・野宮。かつては陸上選手だったが難病にかかり、車いすバスケの世界に飛び込んだ戸川。事故により下半身不随になってしまった高橋。「スラムダンク」の井上雄彦が、三人の男の葛藤とドラマを描く名作！

まんがでSDGs!!

この作品では、病気で障がいを抱えることになった人、事故で障がいを負ってしまった人、そして相手に障がいを負わせてしまった人、という異なる立場にいる３人のキャラクターを主人公として話が進んでいきます。

どのキャラクターも様々な葛藤を内に抱えており、自分の人生と闘いながら前を向いて進んでいきます。「闘う人」という意味において、実は障がいの「ある」「なし」に根本的な違いはないのだ、と思わせられます。そして彼らはけして自分一人の力では闘うことができません。見守る周囲の人々、その助けがあって初めて、誰しも生きることが出来るのです。

パラリンピックの開催も迫るいま、彼らの闘いは健常者・障がい者という枠を超えて、心に迫るものがあると思います。

『夜明けの図書館』

埜納 タオ

双葉社（2011）

～あらすじ～
私立図書館で働く新米司書・葵ひなこ。利用者の調べものをサポートする「レファレンス・サービス」は日々、難題ばかり…。しかし、新人だからこそのパワフルさ、一生懸命に取り組む姿は人の心も動かして…？？
**　レファレンスを通して彼女は「調べもの」の真実に触れ、本と人、そして心を繋いでいく。**

まんがでSDGs!!

「司書」という職業に焦点をおいた本作品。司書の業務のひとつである「レファレンス・サービス」は、利用者からの「こんな情報を探しているのだけれど…」という相談に応え、必要な資料を探し出す仕事です。意外知られていないサービスですが、どんな人でも無料で利用することができます。ひとりひとりの"知りたい" をお手伝いするこの仕事を軸にストーリーが展開され、様々な人が利用する市立図書館という場所で、日々奮闘する司書の様子が描かれています。

**　この作品は、図書館が「老若男女問わず、誰でも質の高い教育を受けられる（生涯学習）」場所であるということ、そして「住み続けられるまちづくりに欠かせない」存在であるということを教えてくれます。さらに司書の仕事を通して、何気ない日常のなかで互いに助け合うことの重要性も教えてくれます。**

『聲の形』

大今 良時

講談社　(2013)

～あらすじ～
大冒険（という名の無茶？）が好きな石田将也は、小学生の時に出会った耳の聞こえない転校生・西宮硝子をいじめた。やがてある事をきっかけに、教室のいじめの犠牲者は硝子から将也へと移っていった。幾年の時を経て、将也はもう一度硝子に会わなければいけないと強く思うように。そして出会った２人に訪れた新たな日々とは…

まんがでSDGs!!

SDGs においては、障がい者など弱い立場にある子どもが、あらゆるレベルの教育や職業訓練に平等にアクセスできるようにする、という目標を立てています。そのための仕組みづくりは最速で取り組むべき課題ですが、最大の課題は私たち人間の認識や心のあり方ではないでしょうか。

本作品の冒頭では、小学校を舞台に「耳が聴こえている人」が「耳が聴こえていない人」をいじめる様子が描かれています。小学生なだけに、非常に無邪気にいじめをする様子がかえって残酷です。これは、当たり前のように障がい者など社会的弱者を差別してきた、かつての人間なのかもしれません。成長した主人公達のように、私達も過去を見つめ直し、その過程で痛みと向き合っていかなければなりません。

『さよならミニスカート』

牧野 あおい

集英社　(2018)

～あらすじ～

少女向けマンガ誌「りぼん」に連載され、「まさか少女漫画でこのテーマを扱うとは！」と話題沸騰した異色の作品。女子で唯一、スラックスで通学する仁那。彼女はかつてアイドルグループのセンターとして活躍していたが、あることをきっかけに引退を余儀なくされた…その秘密とは！？

まんがでSDGs!!

握手会イベントで暴漢に切りつけられ負傷した元アイドルの神山仁那は、名前を変え髪を短く切り、スカートではなくスラックスをはいて学校に通っています。同じクラスの男子・光は、彼女が元アイドルであることに気づきます。彼の妹は彼女のファンだったからです。その妹は、担任からセクハラを受けて引きこもりになっており、それを仁那に打ち明けることで二人の距離は近づきます。

「女である」こと。それを理由に、仁那は「襲われても当然だった」と責められます。被害者であるにも関わらず、さもこちら側に非があるかのように言われる。これは実は世の中的な風潮でもあります。性被害を受けた人間にとっては「世の中」全体が二重の「加害者」になるのです。私達はこの論理のおかしさに、そろそろ気づくべきなのではないでしょうか。

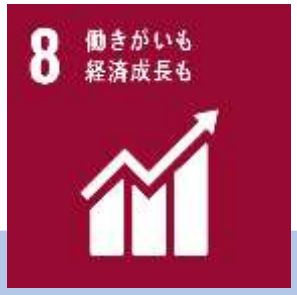
『逃げるは恥だが役に立つ』

海野なつみ

講談社　(2013)

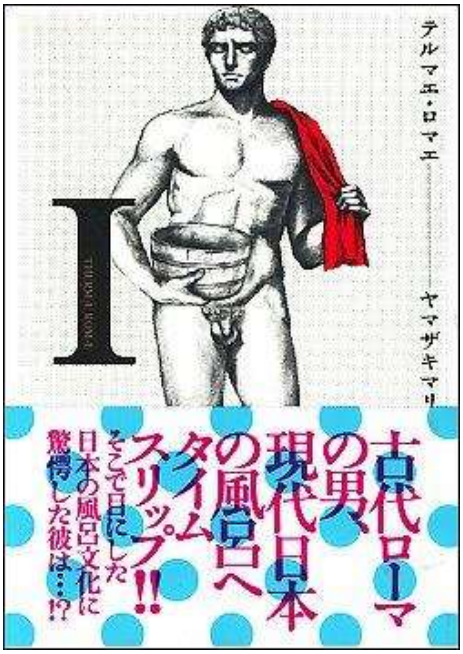
～あらすじ～
星野源の主題歌「恋」ダンスでお馴染みの大ヒットドラマの原作漫画。求職中の森山みくり(妄想癖あり)は父の元部下である津崎平匡の家事手伝いとして働くことになった。ひょんな事から２人は契約結婚をすることになる。愛のない結婚かと思いきや２人は意外といいコンビで…？

まんがでSDGs!!



メインキャラクターであるみくりと津崎は、お互いのニーズとメリットを満たすため「偽装結婚」をし、一方は従業員（家事担当）と雇用主という関係になります。ふつうの結婚では「男と女」の関係には格差や様々な生活上の問題が生じがちですが、この２人はあくまで雇用関係。

そこにジェンダー差別は一切なく、作中のみくりの津崎に対する評価も「突飛な提案にも現実的な解決策を探ってくれる」など、ビジネス（？）の相手として良好な関係が築けていることが伺えます。２人の会話もどちらか一方が要求を押し付けるのではなく、お互いがやりたいことを主張した上で譲歩し合いながら、双方が利益を得られるような道を探していることが分かります。実際の夫婦の関係でも、家事を「労働」としてきちんと認識しこうした手順を経れば、真に平等なジェンダー関係が構築されるのではないでしょうか。



『テルマエ・ロマエ』

ヤマザキマリ

エンターブレイン　(2009)

～あらすじ～
「君のアイデアは古い」と言われて職を離れた、古代ローマのテルマエ(お風呂)技師のルシウス・モデストゥス。ある日、テルマエに浸かっていると排水溝に飲み込まれてしまう。やっと水面が見えてきて周りを見渡してみるとそこは現代の日本だった…。阿部寛主演で映画化もされた話題作！

まんがでSDGs!!

古代ローマからタイムスリップした主人公・ルシウスは、現代の日本のお風呂を参考に素晴らしいテルマエを作ろうとします。また、日本のトイレを使うシーンではその清潔さに驚くシーンがあります。体の清潔を保つことは、伝染病を防ぎ我々の健康を維持します。そのためには、優れた入浴設備とトイレ、そして水道システムが必要不可欠です。現代の日本のトイレ清潔さに驚く外国人が今もいるそうですが、世界中のトイレが同じくらい清潔になればいいですね。

　その様な素晴らしいものを作るのには、古代から連綿と続く人類の叡知を引き継ぎ、技術革新していくことが大切です。また、この漫画に登場する皇帝ハドリアヌスには男色の趣味がありましたが、あまり軽蔑されていません。現代に比べて性におおらかであった古代ローマに我々も学ぶべきかもしれません。

『はじまりのはる』

端野 洋子

講談社　(2013)

～あらすじ～

　実際に福島で３．１１を経験した作者による、福島の高校生達の青春を描く連作集。

　酪農業やシイタケ栽培を営む家の高校生、駅伝への出場を目指す陸上部の高校生、震災をきっかけにかつての同級生らと再会し過去のいざこざと向き合うサラリーマンなど、震災と、その後をどう生きるかを描いた話題作。

３．１１とそれに伴う福島第一原発事故は、東北、そして日本に大きな傷跡を残していきました。それはあまりに巨大すぎて、一人一人が負った傷がどんなものであったか、等身大の人間として理解することは忘れ去られているような気がします。

　この作品は福島を舞台に、酪農業やシイタケ栽培を営む家の高校生、駅伝への出場を目指す陸上部の高校生、震災をきっかけにかつての同級生らと再会し過去のいざこざと向き合うサラリーマンなど、あくまでそこで生活する一市民を主人公に物語が描かれます。震災と原発事故という災禍に翻弄されながらも、ひとりの人間、人間同士として生きねばならないのは同じこと。その葛藤を丁寧かつさわやかに描くのが印象的です。

『「死ぬくらいなら会社辞めれば」ができない理由』

汐街コナ／著　ゆうきゆう／監修

あさ出版　(2017)

～あらすじ～
各種メディアで紹介され話題になった、過労死ルポまんが。監修者は精神科医でもあり、仕事や会社に追いつめられ過労死する人が「死ぬくらいなら辞めれば良い」という発想ができなくなる理由を解説。また、それから抜け出すための方法と、自分の人生を大切にする考え方を描いている。

まんがでSDGs!!

日本人は協調性を重んじ、忍耐強く我慢することが良いことだ、という意識があるようです。そして理不尽な状況でも上司に従い、仕事をこなさなければならないと思っています。過労が原因の自殺や病死を迎える前に「そもそも現状がおかしい」と気付かせてくれる漫画です。

働き方の見直しが進んでいるとはいえ、ブラック企業もまだ多く存在する日本。法律で残業の上限を決めたとしても、精神的・体力的に人間にはみな個人差があるのに、時間で制限するということははたして最適な方法なのでしょうか？「だったら辞めればいいじゃない」と思いますが、何故それができないのでしょうか？この本は、あなたの今までの考えをぶっ壊してくれるものになるでしょう。

『働きマン』

安野モヨコ

講談社　(2004)

～あらすじ～
週刊誌の女性編集者、松方弘子２９歳。寝食も忘れ、凄まじい勢いで仕事に没頭する彼女のニックネームは人呼んで『働きマン』だ。仕事人間の松方だけでなく、彼女の周りで働く様々なタイプの人達の視線や取材を通して、「働くとは何か」を問う作品。

まんがでSDGs!!

雑誌記者としての自分の仕事に情熱を注ぎ、プライドを持つ主人公の松方は、時として鬼のような働きぶりをみせ、成果を出していきます。しかし、この作品はけして「過剰労働を賛美する作品」ではないと思います。なぜなら、松方が取材する相手やともに仕事をする人々は、様々な職業について様々な働き方をしているからです。仕事に向き合う姿勢も傾ける情熱も、現状がどうなのかも十人十色。そんな人々に取材を通して向き合うこと、それ自体が雑誌記者・松方の仕事なのです。

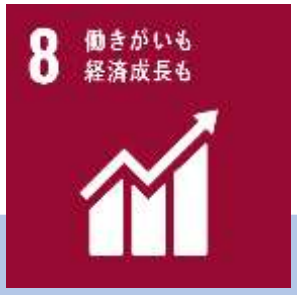
作品の中には、仕事にやりがいを見出せなかったり、ジェンダー格差の中で戦う人間も出てきます。様々な問題を抱える社会の中で懸命に生きる、複雑な人間の心の内が表れている作品です。

『宇宙めし！』

日向なつお 協力：JAXA

小学館（2019）

～あらすじ～
主人公・久世晴可は、低身長を理由に宇宙飛行士を諦め、就職活動中であった。そんなとき、JAXA の「"誰もが行ける宇宙" を目指して一緒に働きませんか？」というキャッチコピーに出会い、自分の夢にもう一度突っ走ろうと決意する。そして JAXA に入社した彼が配属されたのは、まさかの「宇宙食開発グループ」で…！？



宇宙飛行士ではなく、「宇宙食開発」という、まさに舞台裏に重きをおいたストーリー。

長い期間、宇宙に滞在することもある宇宙飛行士の食事は「一度にたくさんのカロリーを摂取できること」「常温での長期保存が可能なこと」など様々な制約があります。その上で宇宙飛行士の健康のことも考えて作らねばなりません。

そんな多くの壁がありながらも、主人公やそれに関わる人たちは、宇宙飛行士が宇宙で食べて「おいしい」と思えるような宇宙食を作るために、日々奮闘します。彼らや節々で登場する宇宙飛行士の姿から、多くのことを学べるでしょう。そして、より良い物の開発のためには多くの人の協力が必要であり、それがやがて、ひとりひとりの働きがいにも繋がるのです。

『ヘルプマン！』

くさか里樹

講談社　(2004)

～あらすじ～
卒業を控えたおちこぼれの高校生である百太郎は、同じくおちこぼれの高校生であるが何故か人望のある仁の話を聞いて福祉に興味を持ち、老人ホームに就職する。
認知症（当時は痴呆と呼ばれていた）の老人の安全と、彼らの幸せとの板挟みになる百太郎は、その答えを見つけ出すことができるのか！？

まんがでSDGs!!

みなさんは、老人の幸福についてどのように考えますか？重度の認知症の高齢者は、いままで当たり前だった安全な生活を送ることができません。一切の怪我無く過ごすためには、たとえば部屋に閉じ込められて、たまにしか外に出られないような生活を受け入れるしかありません。それははたして、精神的に「安らげる」状態なのでしょうか？

主人公は、高齢者の安全を守るために身体を拘束しようとする気持ちと、彼らの心の幸せのために拘束を止めようとする気持ちのあいだで板挟みになり、難しい選択をせまられます。
しかし、そもそも「拘束される老人」と「拘束されることのない主人公」は、人間として平等なのでしょうか？

高齢者施設には今も数多くの問題があります。「幸せに」住み続けられる街づくりのためには、高齢者の真の幸福についても考えることが大切なのです。

『サトコとナダ』

ユペチカ　監修：西森マリー

星海社　(2017)

～あらすじ～
日本出身の大学生サトコと、サウジアラビア出身の大学生ナダは、アメリカの大学に通いながらルームシェアをして暮らしている。
初めてのアメリカ生活も、ナダとの生活で触れるイスラーム文化も、サトコにとって驚きの連続！
『このマンガがすごい！2018』などでも話題になった、魅惑の異文化交流ライフ４コマ。

まんがでSDGs!!

サトコのルームメイトであり親友でもあるナダは、サウジアラビア出身。ムスリム（イスラーム教徒）の女性に初めて出会ったサトコは、異なる文化に衝撃を受けます。最初はびっくりしたものの、慣れてしまえばナダはしっかり者の普通の女の子。すぐ打ち解けて仲良しになりました。

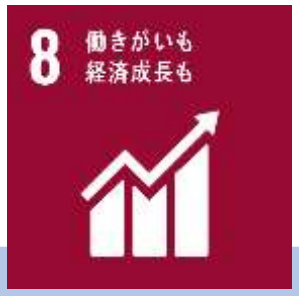
　ムスリムの女性（ムスリマ）として生きていくナダやナダの友人たちは、ニカブというベールを着て体や顔を隠すことに対し、「かわいそうに」と言われます。また、ニカブを着ているというそれだけのことで「ムスリム」として扱われます。でもそれはムスリムに限らず、誰でも同じこと。私達も、一歩外に出れば「日本人」として扱われてしまうでしょう。このマンガは、見た目や性別、国や民族で人間を判断するのではなく、まずは相手自身を知ることが大切なのだ、と教えてくれます。

『恋と国会』

西 炯子

小学館　(2019)

～あらすじ～
三代目世襲議員の海藤福太郎と、元地下アイドルの山田一斗は政権与党・大国民党の一年生議員である。生まれも育ちも政治への想いも全くことなる二人は、はたして国民の幸福を気にせず自らの選挙しか眼中にない国会議員達と国を破滅に導く現職総理の下、真の「政治家」になれるのか！？



まんがでSDGs!!

私達の生活を支える基盤ともいえる政治の世界ですが、その仕組みや現状を知っている人がどれだけいるでしょうか？元地下アイドルの一斗は、政界に存在する複雑怪奇なルールを何ひとつ知らず、その奔放な言動が波乱を呼びます。例えば法案を可決する場で賛成の起立をするためだけに代打をたてる「さしかえ」で、一斗は「話し合いもしていないのに決めるのはおかしい」と異論を唱えます。しかし政界に慣れた世襲議員の福太郎は「与党は選挙によって国民の信任を得ている。国会は与党が出した法案を通していく場所であり、話し合いの場ではない。それが民主主義だ」と言い放ちます。
今の政界は何が起こってもおかしくない、嘘の様なことばかりが起こってしまう状態です。国会は国のことを決める責任があり、国民のための政治をするべきではないでしょうか？国会に関する豆知識、そして今の日本のダメなところが丸わかり！？

『風の谷のナウシカ』

宮崎 駿

徳間書店　(1984)

～あらすじ～
アニメ映画『風の谷のナウシカ』に先立って宮崎駿監督自身が描いた長編マンガ。
貧しい「風の谷」に暮らす少女ナウシカは人々が忌み嫌う「蟲」達と心通わせながら、毒に満ちた腐海の秘密を探っていた。ある日、谷に巨大な輸送機が墜落し、それを追って巨大帝国トルメキアの軍隊が谷を占領する。彼らの真の目的とは…

まんがでSDGs!!

映画版で描かれたのは２巻のエピソードまでで、実はそれ以降に、ナウシカの世界の成り立ちに関わる壮大な物語が展開されています。かつて人類が起こした大戦争「火の七日間」は世界を汚染し尽くしました。

腐海は有害な瘴気を放ち、ナウシカ達はマスクなしに過ごすことができません。しかし、実はその腐海自体が人類の残した毒素を浄化していて、水を綺麗にしているのです。

一方、大帝国トルメキアはかつての人造兵器「巨神兵」を復活させようと目論み、兵力をもって各地を制圧していきます。

このようなエピソードは核戦争や環境汚染といった人類の罪を彷彿とさせます。また、後半さまざまな民族や敵同士だった人々が協力しあいナウシカを助ける様子は、困難な状況におけるパートナーシップの大切さを教えてくれます。

『沈黙の艦隊』

かわぐちかいじ

講談社　(1998)

～あらすじ～
日本政府はアメリカとの共同作戦により、国内初の攻撃型原子力潜水艦「シーバット」を秘密裏に建設していた。同艦には海上自衛隊の海江田四郎と 76 名の日本人が乗り込むが、初航海の最中に突如クーデターを起こし、シーバットごと姿をくらました。やがて、海江田とその乗員たちは自分達を「独立国家やまと」と名乗り、アメリカを挑発する。はたして彼らの目的とは！？

まんがでSDGs!!

原子力潜水艦は、文字通り原子力のパワーを使って航行します。さらに海江田たちの潜水艦「やまと（シーバット）」には、実は核弾頭が搭載されているのではないか、という謎がつきまといます。それが少数の軍人たちによって乗っ取られ、独立国家を名乗り世界の海を航行する…これを聞いて、私達の多くは「危険極まりない！」と思うでしょう。

しかし、世界にはアメリカやロシア、中国、インド…等々、いまだ多くの核弾頭を保持する国があります。そのような国がある限り、対抗するために核を保持することで「核の抑止力」とする考えも無くなりません。そして潜水艦「独立国家やまと」は、核の抑止力をこれ以上なく象徴する存在なのです。

どの国家にも与さず、核をもって世界の均衡をとろうとする海江田と「やまと」は、はたして善なる神なのか？それとも、世界を恐怖に陥れる悪魔なのか？

『戦争は女の顔をしていない』

小梅けいと 原著：スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ

KADOKAWA　(2020)

～あらすじ～
2015年にノーベル文学賞を受賞したスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチの著作を、まさかのコミカライズ！第二次世界大戦でソ連の兵士や後方支援の人員として従軍した女性たちの膨大な証言をもとに、ライトノベルの挿し絵で人気のイラストレーター小梅けいとが新たな世界を作り出す。

まんがでSDGs!!

ベラルーシの女性ジャーナリスト、スヴェトラーナ・アレクシーエヴィチ。彼女はアフガンに侵攻したソ連の帰還兵たちの証言や、チェルノブイリ事故に遭遇した市民たちの証言など、想像を絶する災厄に巻き込まれた人々の記憶を丁寧に収集し、ノーベル文学書を受賞した人物です。

この作品は、第二次世界大戦に従軍したソ連女性たちの証言を集めた処女作『戦争は女の顔をしていない』をもとに、日本のイラストレーターがコミカライズを試みたマンガです。戦争証言集といういわば「重い」テーマをまさかコミカライズするとは…と大きな話題になりました。

しかし、そのアンバランスさが「戦争」の本質をよく表しています。可愛らしい絵柄で描かれる女の子たちは、まさしく何も知らなかった純粋な女性たちの心であり、描かれる戦争の残酷さはどこか非現実的ですらあります。こうの史代『この世界の片隅で』とあわせて読みたい作品です。

本稿に掲載されている本の書影は「版元ドットコム」https://www.hanmoto.com/
を経由して各出版社より掲載の許可を頂いているものです。

2020.2.10　発行